

肝炎ウイルス検査受検率向上のための行動経済学的研究

研究分担者：平井 啓 大阪大学大学院 人間科学研究科

研究要旨：本研究は、肝炎ウイルス検査の受検率向上を目的として、行動経済学的アプローチを活用した介入手法の実装に取り組んだ。昨年度抽出された7つの行動経済学的要因（ナッジの展開、対象年齢層の特定、意識向上キャンペーン、職種特有の検査促進、非専門医への情報提供、受診状況の把握、地域特有の戦略）とHCV排除カードの効果に関する知見を基に、肝炎医療コーディネーター向けのスキルアップ研修プログラムを開発した。研修プログラムは、講義、実習、グループワークを統合的に組み込んだ3時間の集中的なプログラムとして設計され、特に2人1組でのロールプレイ実習や小グループでの事例検討を通じて、参加者が行動経済学の知見を実践的に活用できるよう工夫された。また、研修効果を客観的に測定するため、研修前後での評価と3ヶ月後のフォローアップ調査を含む評価システムを構築した。本プログラムの実施により、肝炎医療コーディネーターの支援スキル向上と、地域における継続的な学習・支援のネットワーク形成が期待される。

A. 研究目的

肝炎ウイルス検査の受検率向上に資する新規戦略の実装を目的として、昨年度の研究成果に基づく行動経済学的アプローチを活用した研修プログラムの開発を行った。

B. 研究方法

昨年度の研究で抽出された肝炎ウイルス検査受検率向上のための7つの行動経済学的要因および、HCV排除カードの効果に関する知見を基に、肝炎医療コーディネーター向けのスキルアップ研修プログラムを企画・設計した。研修プログラムは、講義、実習、グループワークを組み合わせ実践的な内容とし、行動経済学の基本概念の理解から実際の患者支援への応用までを包括的に学習できる構成とした。

C. 研究結果

昨年度の研究において抽出された7つの行動経済学的要因と、HCV排除カードの効果に関する知見を実践的な介入手法として具現化するため、包括的な研修プログラムを開発した。本研修プログラムは、肝炎医療コーディネーターが行動経済学の知見を実践的に活用できるよう、以下の要素を統合的に組み込んで設計された。

研修プログラムの基本設計

研修プログラムは、半日（3時間）で実施可能な集中的なスキルアップ研修として設計された。プログラムの目的として、行動経済学の基本概念の理解と実践的な患者支援スキルの習得、さらには患者の心理的バリアの理解と効果的な介入方法の修得を設定した。特に重要な要素として、コーディネーター同士の経験共有と相互学習の機会を提供することで、支援スキルの向上だけでなく、地域における継続的な学習と支援のネットワーク形成を目指した。

研修プログラムの具体的内容

研修プログラムは講義、実習、グループワークの3つの要素で構成され、それぞれが有機的に連携するよう設計された。

まず講義パートでは、行動経済学の基礎概念である損失回避や現在バイアスについて、医療現場での具体例を用いて解説する。特に、昨年度の研究で効果が確認されたHCV排除カードの事例を用いて、エンドウメント効果や損失回避が実際の医療行動にどのように影響するかを説明する内容とした。

実習パートでは、2人1組での機能分析ロールプレイを通じて、患者の意思決定プロセスを理解し、適切な介入方法を検討する実践的な演習を行う。このロールプレイでは、特に「患者の見える世界」を理解するための面接技法の習得に重点を置いた。

グループワークは2部構成とし、第1部では効果的な患者支援ツールの作成、第2部では困難事例の検討を行う。4-5人の小グループでの作業を通じて、参加者それぞれの経験と知識を共有しながら、実践的な解決策を見出すプロセスを体験できる構成とした。

評価システムの確立

研修効果を客観的に測定し、プログラムの継続的な改善を図るため、複層的な評価システムを構築した。具体的には、研修前後での理解度とスキルの自己評価、研修直後の参加者アンケート、そして3ヶ月後のフォローアップ調査を実施する。特に、フォローアップ調査では、研修で習得した知識やスキルが実際の現場でどのように活用されているか、また、どのような課題が生じているかを詳細に把握することで、次年度以降のプログラム改善に活用する。

実装に向けた準備

開発した研修プログラムは、次年度の実施に向けて具体的な準備を進めており、2025年度中に第1回目の研修会を実施する計画である。研修効果の最大化を図るため、参加人数は60名程度に設定し、グループワークを効果的に実施できる環境を整備することとした。また、研修で使用する教材や評価用紙などの開発も完了し、実施に向けた準備は整っている状況である。

D. 考察

本研究で開発した研修プログラムについて、その意義と期待される効果を以下の観点から考察する。

理論と実践の効果的な統合

行動経済学の理論を実践的な患者支援に結びつけるアプローチは、これまでの医療現場における介入方法に新たな視点を提供するものである。特に、昨年度の研究で明らかになった7つの行動経済学的要因を実践的なスキルとして習得できるよう設計された本プログラムは、理論の理解にとどまらず、実際の現場での応用可能性を高めている。

ロールプレイやグループワークを通じた実践的な学習方法を採用したことで、参加者は行動経済学の概念を単なる知識としてではなく、実践的なツールとして習得することが期待される。特に、HCV排除カードの効果に関する知見を具

体的な事例として活用することで、エンドウメント効果や損失回避といった概念の実践的な理解が促進されると考えられる。

効果測定と継続的改善の仕組み

研修前後での評価に加え、3ヶ月後のフォローアップ調査を組み込んだ評価システムの構築は、プログラムの短期的効果と持続性を検証する上で重要な役割を果たす。この多層的な評価アプローチにより、以下の点が可能となる：

1. 参加者の知識とスキルの向上度の客観的な測定
2. 研修内容の現場での活用状況の把握
3. 実践における課題の早期発見と対応
4. プログラム改善のための具体的な示唆の獲得

これらの知見は、プログラムの継続的な改善と発展に活用できるだけでなく、肝炎医療コーディネーターの支援活動の質的向上にも貢献することが期待される。

持続可能な支援体制の構築

本研修プログラムの特徴的な要素として、コーディネーター間のネットワーク形成を促進する設計が挙げられる。グループワークや事例検討を通じた相互学習の機会を提供することで、以下のような効果が期待される：

1. 地域における継続的な学習と支援のネットワークの確立
2. 好事例や効果的な介入方法の共有による実践知の蓄積
3. 地域特性を考慮した介入戦略の開発
4. コーディネーター間の相互支援体制の強化

これらの要素は、研修終了後も持続的に機能する支援体制の構築に寄与し、地域全体での肝炎ウイルス検査受検率向上への取り組みを強化することが期待される。

今後の課題と展望

開発した研修プログラムの実装に向けて、以下の課題に取り組む必要がある：

1. プログラム内容の標準化とマニュアル化による全国展開の準備
2. 地域特性に応じたカスタマイズ可能な要素の特定
3. オンライン研修等の代替実施形式の検討
4. 長期的な効果検証方法の確立

これらの課題に取り組むことで、より効果的かつ持続可能な研修プログラムとして発展させることが可能となる。

E. 結論

本年度の研究により、肝炎ウイルス検査の受検率向上を目的とした行動経済学的アプローチを実践するための具体的な研修プログラムを開発した。このプログラムは、昨年度までの研究成果を実践的な介入手法として具現化したものであり、次年度の実施を通じて、肝炎医療コーディネーターの支援スキル向上と、それに伴う検査受検率の向上が期待される。

F. 政策提言および実務活動

なし

G. 研究発表

1. 発表論文

1. Yoshida S, Hirai K, Sasaki S, Ohtake F. How does the frame of communication affect cancer patients' decisions? – from a behavioral economics point of view. *Annals of Palliative Medicine*. 2024;13(2):211-220.
2. Hanai A, Ishikawa T, Sugao S, Fujii M, Hirai K, Watanabe H, Matsuzaki M, Nakamoto G, Takeda T, Kitbatake Y, Ito Y, Endo M, Kimura T, Kawakami E. Explainable Machine Learning Classification to Identify Vulnerable Groups Among Parenting Mothers: Web-Based Cross-Sectional Questionnaire Study. *JMIR Formative Research*. 2024;8:e47372.
3. Kawasaki Y, Hirai K, Nii M, Kizawa Y, Uchino A. Factors Involved in Shared Decision-making Regarding Treatment Selection by Patients With Cancer. *Cancer Diagnosis & Prognosis*. 2024;4:57-65.
4. Yoshida S, Hirai K, Ohtake F, Masukawa K, Morita T, Kizawa Y, Tsuneto S, Shima Y, Miyashita M. Preferences of bereaved family members on communication with physicians when discontinuing anticancer treatment: referring to the

concept of nudges. *Japanese Journal of Clinical Oncology*. 2024;1-10

2. 学会発表

1. 平井 啓・山村麻予・松村悠子・見上日奈子・三浦麻子・八木絵香・坪倉正治・大竹文雄:がんや甲状腺に対する知識・態度によるセグメンテーションに応じたメッセージ効果の検証. 日本社会心理学会第65回大会, 2024. 9. 1 世田谷
2. 平井 啓・坂口桃彩・伊吹紀乃・渡邊拓人・内野詠一郎・吉田安里・奥野恭史・峰晴陽平:特定保健指導に対するアドヒアランス向上に向けた対象者の認知と行動的特徴に関するセグメンテーション分類. 健康心理学会 第37回大会, 2024. 11. 24 別府
3. 平井 啓・田辺和奏・岡浩一朗・佐藤洋子・中谷英仁・佐々木敏・水野 篤・山本精一郎:健康信念・リテラシーに関するセグメント別の健康への動機づけメッセージの開発研究. 第31回日本行動医学学会学術総会 第26回日本子ども健康科学学会学術大会 合同開催, 2025. 2. 2, 東京

3. その他

啓発資料

なし

啓発活動

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし